

## 学園長国信玉三先生

—その教育精神について—

比治山学園は私学である。私学であって国立でも公立でもない。だからこそ、独自の教育を施すことができ、比治山学園らしい学風を育てることができるのである。

一般に、私学において個性豊かな独自の教育が行われているのは、それは塾長ともいべき人物がその教育の中枢をなしておられるからである。松下村塾の志士の教育が吉田松陰により、自由の気風に漲る慶応義塾の教育が福沢諭吉の精神によっているのなどはその例である。そして比治山学園には国信玉三という校祖とでもいべき先生がいらつしやる。その先生の教育観に基づいて建学精神が示され、そこから比治山学園らしい学風が生れてきたのである。

国信先生の教育目標は「学生生徒がそれぞれに親心に帰り、その期待に応えて精進すること」である。ここにいう「親心に帰れ」とは、限りなく大きい親の慈悲心に感謝の心で応えよ、ということなのであるが、それは、親が子を慈しむ心に打算がないごとく、子供も計算ぬきの感謝の心で応えねばならないという意味なのである。ここからして先生の教育は、「親」をぬきには語れないということがわかるのである。

ところで野口英世博士については、ここに改めて述べる要はないのであるが、博士をして偉大な功績を挙げさせたのは、母親の慈愛であったと思われる。

毎日西さ向いて拝み、東さ向いては拜んでおります……ついたちに塩絶ちしています

これは、博士の母親から博士に送られた手紙の一節であるが、毎日神仏に祈り、塩絶ちの願掛けまでして、わが子の息災をねがうこの母親の心情に、胸の熱くなるのを覚えるではないか。この母親には微塵も打算はない。あるのは純粹な慈愛の心情だけである。野口博士の偉大な功績は、この母親の打算ぬきの慈愛に応えられたものとみてよい。

ひるがえって、国信先生のご業績をみると、ここにもまた母親の偉大さをみることがができる。

母の亡き骸を前にして……仏壇の引き出しを調べていたら二つの財布が見つかり、その中に合せて七十五銭の硬貨が入っていた。「七十七年間のご苦辛が、たった七十五銭のご遺産でしたか」。兄弟の一人は遺骸にとりすがって泣きくずれた。

これは『比治山』第四号所収の先生の一文であるが、母親の打算ぬきの心情に目頭をおさえぬ者はないであろう。先生の教育観の源泉は、実にここにある。わが身のことは犠牲にして考えぬ母親に、一切の我執を捨てて応えたいと願う心が「親心に帰れ」の教育精神となつて現われたものと思われる。そしてこの精神こそが、わが比治山学園の建学精神なのである。私共は、先生のお教えに従い、親心に帰り悠久不滅の生命の理想に向つて精進したいと思う。それが、とりもなおさず建学精神の具現であるからである。

先生は、昨年めでたく米寿をお迎えになり、この四月からは、学園長という本学園教育職の最高位にお就きになられた。どうぞ、いつまでもご健勝で、学園の将来を正しくお導びき下さい。私共は、そればかりを心から希っているのである。